



# 室小だより

茅ヶ崎市立室田小学校

令和4年2月号

校長 下反達二

学校教育目標「豊かな心を持ち、主体的・創造的に行動する子の育成」

## 「かげおくり」

寒空の朝、正門に立っていると、ある子が誇らしそうな表情で、「校長先生、ほらこれ」と見せてくれました。冷たさで少し赤くなったその手には、大切に霜柱が収められていました。「ああやっぱり子どもは子どもなのだ」と、ほっこりとした気持ちになります。

作家のあまんきみこさんの作品に「ちいちゃんのかげおくり」というお話があります。小学校3年生の教科書に随分前から掲載(昭和61年の光村出版の教科書が最初のような)されておりましたので、もしかしたら、実際にこれを読んで、「かげおくり」をして遊んだ記憶のある人もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「かげおくり」とは、影法師をじっと見つめて10秒ほど数え、その後すぐ空を見上げると、影が空に映って見えるという遊びです。人間の視覚の残像現象を利用したものだそうです。

物語は、ちいちゃんとお父さんお母さんお兄ちゃんの4人で墓参りに行ったあと、家族で手をつないでかげおくりをする場面からはじまります。四つの家族の像が青空に浮かびあがります。その翌日お父さんは戦争へと向かいます。家族3人の暮らしとなった夏、空襲に遭い、ちいちゃんは家族とはぐれて独りぼっちになってしまいます。防空壕(ぼうくうごう)で、意識が遠のいてゆく中、ちいちゃんは家族と遊んだかげおくりの夢を見ます。夢の中で彼女は独りで「かげおくり」を試みます。すると、空には家族4人の影が浮かびます。彼女の体はすうっと空に吸い込まれていき、お父さん、お母さん、お兄ちゃんに再会するのです。そして「こうして、小さな女の子のいのちが、空にきえました。」と締めくくられます。読むたびに涙が出そうになります。シンプルですが、戦争の悲しみを静かに淡々と語りかけるこの作品は、読者の胸を打ちます。

今年で終戦から76年目を迎えています。そういえば、私が小学生の時分に担任の先生が「戦争を知らない子どもたち」という歌を歌って戦争の悲惨さ、平和のかけがえのなさについて話して下さったことを思い出します。その先生は、若い先生で、戦争体験者ではありませんでしたが、切々と話されるすがたと、一生懸命に伝えようとされているすがたは、今でもしっかりと心に残っております。体験していなくても人間には想像力があります。映像や本を見たり読んだりすることによっても、平和の尊さや戦争の悲惨さを感じ取ることもできます。室小の子どもたちが、様々な体験をする中で、いろいろな人の生き方に触れる中で、平和の尊さについて感じ取ってほしいと願っております。

あまんきみこさんは、1982年に刊行したこの絵本のあとがきでこう述べています。「無限宇宙に浮かぶ地球星が、たくさんの子どものたちのよるこびで光りますように。それを不可能と思うとき、すべては不可能になるのですから」と。



新型コロナウイルス感染の急拡大が心配される中ですが、教職員と感染拡大の防止対策について再確認し、緊張感をもって、感染防止対策の徹底に取り組んでまいります。引き続きご理解ご協力をお願いいたします。